

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第7回

# 「あいだ」を感じるフィンランド紀行

ユヴァスキュラ、あいに

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、  
総合研究大学院大学)

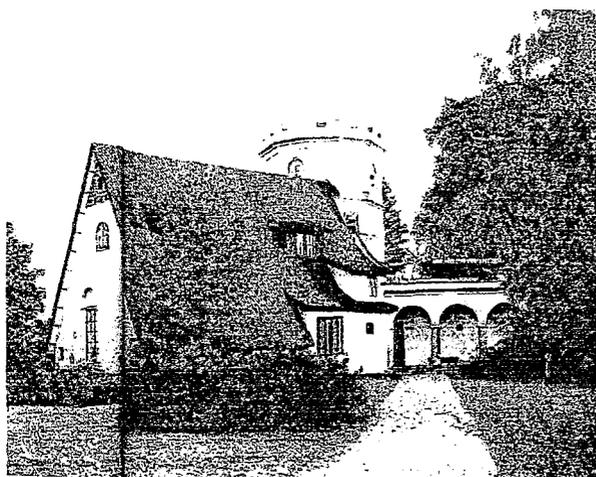
フィンランドを一週間だけが訪れる機会があった。東アジア、東南アジアを専攻するフィンランドの大学院生のための全国ネットワークができていて、その夏季セミナーに講師として呼ばれたためである。フィンランド中央部に位置するユヴァスキュラ大学の、湖面に臨むキャンパスで、論文指導、講演、博士論文中間発表の講評など、多忙な日程をこなしたあと、週末に飛行機待ちで、首都ヘルシンキに二泊した。首都のホテルには週末料金の制度があったが、週末のほうが割り引きだった。森と湖の広がるこの国で、好き好んで週末を都会で過

ごす人は少ないらしい。輝く夏の末、ゆったりと流れる贅沢な時間をしばし満喫した。

1

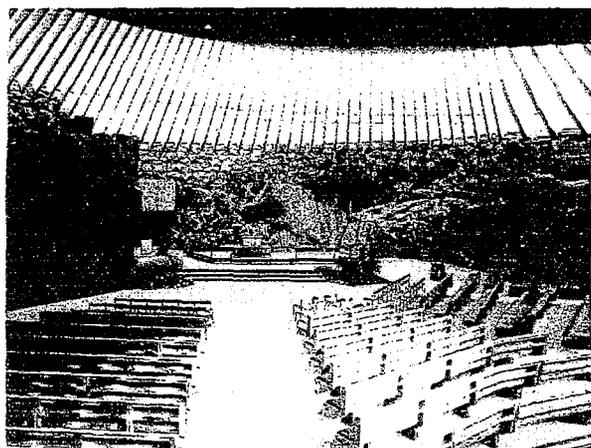
この機会に、限られた時間だが、ヘルシンキ近郊のいくつかの建物を見学できた。時代順に、まずは国民的な画家であり、装飾家としても知られる、ガッレン=カレラ(1865-1931)。国民的叙事詩『カレワラ』に題材を得た壁画で知られる画家自らが設計したアトリエが、ヘルシンキ郊外に公開されている。市電4番に乗って、市街を東北に終点のあたりまでいって下車。そこから

海沿いに邸宅街を西に半時間ほど歩く。はしけのように湖を跨ぐ木製の橋があって、足元にまで波しぶきが飛んでくる。それをふたつばかり越えたころ、こんもりとした森が眼前に現れ、表札がアトリエの所在を示す。そのこだかい丘のうえに、合掌造りのような姿の、樹皮で葺いた屋敷が佇んでいる。ローマの塔のような十二角形の塔がその横に食い込んでいて、内部に入ると階段室と展示室となって四階まで続いていた。



ガッレン=カレラのアトリエ (設計は本人による)

一階西がひろいアトリエとなっていて、北側には温室のように天井に達するガラス窓がある。画家がかつて留学したパリのアバルトマンの画室によくある意匠だが、それが巧みに応用されている。北欧の弱い冬の光でも、アトリエには十分な採光が得られる工夫だろう。その窓辺に沿って、細い作業台が伸び、机と窓枠との間には、一段の浅い棚が設けられている。こんな環境で仕事三昧となれば理



テンペリアウキオ教会 設計：ティモ/トゥオモ・スオマリネン兄弟

想的なことだろう。アトリエの東中央の暖炉は、半地下の浴場と背中合わせになっていて、煙突を共有し、煙路が放熱装置となっている。その左右の通路からは、60度ほど屈折した応接間に抜けられる。こちらは修道院風の回廊を巡らした平屋で、天井のない屋根裏に、これまた温室のような天窓が穿たれている。画家生前の写真を見ると、壁の中央にはチベットのタンカを背景に薬師如来らしい座像が、左右に白い象を従えて不思議な三尊の姿で黒檀の筆筒のうえに並んでいる。ガッレン=カレッサもパリ時代におりから流行のジャポニズムに感染し、それを自らの装飾表現に取り入れていた。

こうして一階を一回りしたあたりで、アトリエと居間との中央に位置する階段室を昇る。合掌造りの側の二階は、現在では小さな講堂とし用いられている。その後方を螺旋を四分の一ほど昇ると、中心軸をずらして北に伸びた、三階の奥まった展示室。さらに螺旋をもう四分の一ほど昇ると、最上階に至る。そこからは、四方に窓が開かれ、南側から外を眺めると、フィンランド湾が、昼過ぎの弱い日光を浴びてきらめいていた。庭を隔てて訪問客用のレストランがあり、三々五々訪れる客たちが、テラスで軽い昼食や飲み物を楽しんでた。

## 2

首都の中央駅から北西に3ブロックほど行ったあたりに、氷河の削り残した岩盤を削り貫いて作られた、地下聖堂がある。ティモ/トゥオモ・スオマリネン兄弟設計になる、テンペリアウキオ教会。1969年に落成したルーテル派の教会である。最高部は9メートルに達する岩盤のうえに上がって見ると、地上に降り立った「未知との遭遇」の円盤、といった様子で暗黒色の円蓋が、岩盤になかば埋もれている。周辺を取り巻く6階建ての民家のなかに、それよりもひとまわり低く、ひっそりと息を潜めて隠れているようだ。似たような地下聖堂としては、ただちにブラジリアのオスカー・ニエマイエルによるカテドラルが思いおこされる。南米のカトリック教会は、暗黒の地下坑道を抜けて光りに満ちた巨大な天蓋へ、という劇的な演出に腐心していた。それは、埋葬と復活、あるいは試練を経た末の栄光という道行きを体験させるものだった。それに対し、北欧のこのルター派の空間は、より簡素で人間的な尺度の慎みを守っていて、神の栄光を威圧的な脅威として体験させようとはしない。ドームの直系は24メートル、頂点は床から13メートル、という。圧迫感とも解放感とも無縁な、不思議な安心感を生み出す算術と幾何学が、こ

こにある。岩盤の岩肌を生かした壁面に囲まれたなか、そのうえに、あたかも円蓋が中空に浮いているかのように漂っている。車輪のスパークのような放射状の180本のコンクリートの細い梁は、嘘のように軽やかで、日光は、その梁の透き間に乱反射しながら透過して、梁そのものを白色の光源に変え、円形の室内全体に、柔らかく降り注ぐ。木製の座席に座ってみる。その木目に合わせるように、コンクリートの壁面も、材木を型にした打ち放しのままで、そのざらざらとした質感が、鉄板の打ち抜きとは違う暖かさを、目に伝えてくる。

### 3

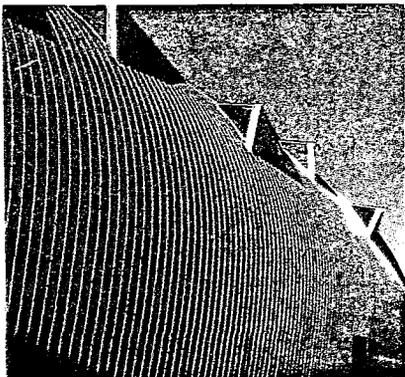
最後に、新名所のひとつ、といえ、国立現代美術館。中央駅西北の再開発地区、中央郵便局の隣に、まるで巨大な飛行船が不時着したような、というか、『風の谷のナウシカ』に登場したかのオウムが漂着したような、筒状の構築物がある。反対側の国会議事堂の側から見れば、開放的な窓がジュラルミンの金属質の窓枠とともに、東南の日光を浴びて輝いており、こちらは近代建築らしい、硬質な立方体の姿を見せている。歪んだ紡錘形と方形と。このまるっきり異質な表裏を、構造体として中央で交差させる、という大胆な発想を示したのが、建築家のスティーヴン・ホール。美術館も

その名をキアズマと命名された。

一見奇を衒う構想でありながら、空間としての演出のうまさには、舌を巻く。まず円筒の南側の入り口からのアクセスが明快。冬季の寒冷に配慮した二重扉の先には、分かりやすい位置に開放的な受付があり、そのすぐ右側には荷物預けの棚。じつに機能的な配置で、右往左往する必要もなく、流れるようにして、建物奥へ誘われる。ゆるやかに左旋回してゆく胴体部分のアプローチも新鮮。その吹き抜けと、その奥に姿を現す螺旋階段のデザインも見事。木材打ち抜きの風合いが温もりを感じさせる白亜の壁に、暗色の床、そこに天井から陽光が柔らかく降り注ぐ。訪問客に威圧的なそぶりは見せずにおいて、徐々に細くなる回廊が、遠近法のだまし絵の要領で、人々の視線を誘惑する。ところがいざ展示室に入ると、今度は逆に、ホルンの共鳴筒よろしく、奥の部屋ほど裾広がりになっていて、意外な解放感を感じさせる。実際、西の壁面は外側に向かって10度ほど傾斜しており、加えて東側は円筒構造だから、閉塞感を味わうどころか、むしろ上階にあがるほどに空間が膨らむ。最上階に昇ると、弧を描く天井／屋根からは、再び陽光が優しく射し込んでくる。

建物北側の外部に出てみると、こうした4層の構造が、楕円の円筒を輪切りにしたように、突如垂直に断ち切られ、赤みがかった切り口の皮膚に囲まれて、内部がショーケースのように露出している。立体劇場の舞台を思わせるこの側面が、斜めから朝日を浴び、真昼には日陰を作り、日没後に照明を入れると内部から輝いて、さまざまに表情を変えて行く。思いがけないさまざまな工夫が隠されているが、ひとたび内部に憩えば、繭にくるまれたような安心感に浸れる。そんな建築の、人間的な体温といったものを、久方ぶりに味わった。

そしてこれは、いささか乱暴な一般論かもしれないが、フィンランドの建築の公約数なのかも知れない。美しい工場や大学の



国立現代美術館「キアズマ」  
設計：スティーヴン・ホール

キャンパス、さらには日々の生活を大切に  
して、週末には都会をあとに湖畔の田舎家  
で過ごすことに人生の価値を見いだす人々  
の長年の知恵、コンペでの建築の選定にも、

あるべき環境への確たる思想といったもの  
が仄見えてくる。豊かな時間とゆとりある  
空間。それ日本に求めるのは、所詮無い物  
ねだりなのだろうか。